

飯舘調査についての報告

実際の調査活動で感じたことは技術面と行政面の二つがあります。まず技術面について、現在提案されている農地の除染方法には、クラックへの対応や土の廃棄処理など様々な問題があり、より現場に即した方法が求められているという話を伺い、自分たちがやっている研究は理想化された実験環境下でのデータに基づくものが多く、実用化との間にはまだまだ大きな隔たりがあるのだと感じました。また今回の調査で一番関心を持ったのが、情報通信技術についてです。宗夫さんの圃場内には Wi-fi 環境が整備されており、定点観測データやモニタを搭載した車で村内を回って得られたデータなどが、全部宗夫さん宅に集積されるというシステムが出来上がっていて驚きました。このシステムをより拡大させていけば、いずれは国が発表する放射線量よりも詳しくリアルタイムなデータを住民の方々が自由にアクセスして知ることができるので、そういった技術や情報を提供していくことも復興につながるのだと感じました。一方行政面についてですが、支援者の方々から今まで知らなかった行政対応の実態を伺い驚くとともに、東大生が日本を背負う存在として本当に期待されているということを感じました。研究を行い技術面でリードしていくのはもちろん、東大卒も多くいる官僚の方々にこそ現場を見て、みんなが村で暮らしたいと強く願っていること、住民の生活範囲は区切ったり数値化したりできるようなものではないこと、自分たちが決めた方針が直接住民の生活に関わってくることをもっと意識してほしいと思いました。最後に全体を通して感じたことですが、私は自分の目で自分の耳で生の現場の様子を知りたいという気持ちでこの活動に参加しました。今までに被災地を訪れたことも、放射能関係の講演会にも参加したことのない私は、テレビや新聞などで報道される情報しか持っておらず、福島とくに飯舘村と聞くと、村民のほとんどが避難してしまったゴーストタウンをイメージしていました。しかし現地入りしてみるとその勝手な想像とは異なり、予想以上に多くの人々が実際に生活していました。また昼食時には村のお母さん方が準備をしてくださったのですが、東京からきた私たちに対して、この水道水は汚染されていないから大丈夫よ、本当はおいしいものいっぱいあるけど食べさせてあげられないのが残念と言ったとき、どんな気持ちだったろうと思いました。もし自分のふるさとが同じように放射能で汚染され住むことも帰ることもできなくなったらと想像したら、今回の福島の問題は日本に住む者として遠く離れた土地で起こった事故としてではなく、自分の住む土地という意識を持ってもっと真摯に取り組まなければならないと感じました。遠くにいて研究をしたり募金をしたりすることも大切ですが、私はもっと現場に行って少しでも今の状況を変えて行けるようにしたいと強く感じ、これから活動する上でのきっかけになったという点で今回の活動は有意義だったと思います。貴重な体験をありがとうございました。